

Steel Landscape

鉄の点景



夏の風物詩、風鈴。無骨な印象を持つ鉄の風鈴だが、その音色は驚くほど澄んでいる。近年では、形だけでなく、彩りにも工夫がなされるようになってきた。

風鈴

江戸風鈴気ままな風をとらへけり

— 斉藤真子

風鈴を聞きながら、縁側に腰掛け西瓜をかじる——日本の失われつつある夏の風物詩のひとつである。最近は日常的に見かけることは少なくなったものの、風鈴の情緒を惜しむ人は少なくない。風鈴にはガラス製や真鍮製などもあったが、今でも年間百万個以上生産されているのは鉄の風鈴で、民芸品として鉄づくりの古い伝統のある地方でつくり継がれているのである。

残したい日本の音文化

岩手県に「風鈴駅」の別名を持つ駅がある。JR東日本の水沢駅である。900年に及ぶ歴史を誇る南部鉄器のふるさとといわれる水沢市では、毎年夏になるとホームに当地で製作された風鈴を吊るし、乗降客を楽しませている。1960年代から続いている行事で、ちょっとした風鈴ブームのきっかけにもなった。南部鉄器のふるさととして水沢と並ぶ盛岡でもこの駅頭風鈴は夏の呼びものとなっている。南部鉄器の、というより日本の鉄のふるさとといってもよいこのあたりでは、夏は風鈴の音色とともにやってくるようである。

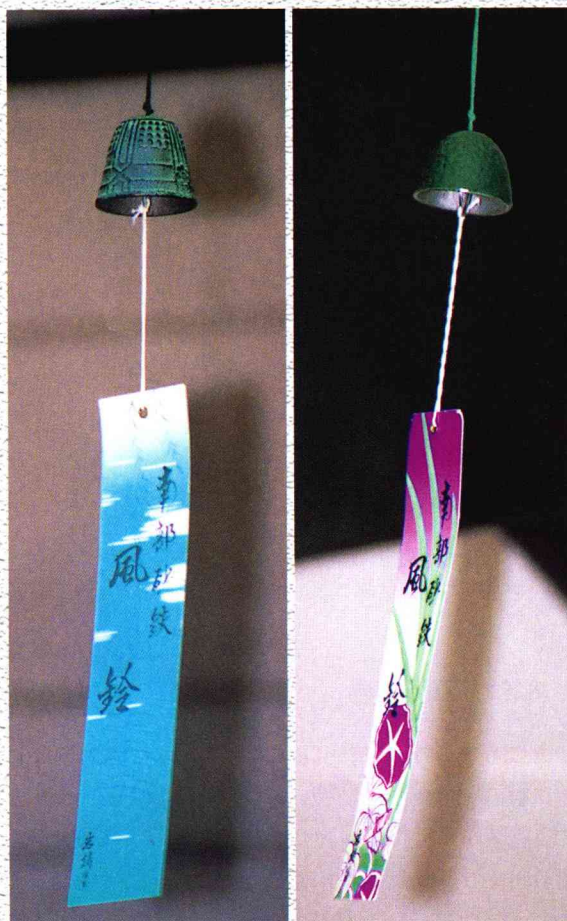
自然の音に情緒的に反応するというのは日本人の伝統的な感性で、たとえば日本人が古来愛でてきた虫の声なども、西欧などでは関心を払う人が少ないという。風鈴の音は人工の音

ではあるが、風に誘われて時折鳴り出づる風情は自然の音に近い。風鈴の音に涼を求めるのも、そうした日本人独自の音の文化の世界で、失いたくないもののひとつである。

そんなところから、風鈴の音は環境庁による残したい「日本の音風景100選」（平成8年）にも選ばれている。

風鈴と南部鉄

風鈴が普及するようになったのは江戸時代からといわれる。鉄の風鈴では、比較的古くからつくられているものとして宮城県登米郡登米町の「松笠風鈴」がある。鉄鑄物の手づくり風鈴で、約200年前、仙台藩主に音色のよい風鈴の製作を依頼されたのが始まりとされる。鑄物銑に砂鉄を混入した独特の材料配合に秘密があるようで、ひとつひとつ異なる独特の澄んだ音色が美しい。



現在、鉄の風鈴の代表格といえば南部鉄の風鈴である。だが、関係者の話によると、南部藩の庇護のもとに鉄瓶や鉄釜などの生活用品をつくり続けて約400年というその古い歴史の中で、風鈴が登場するのは意外にも大正時代になってからという。南部鉄の風鈴が庶民の間にまで普及したのはさらに遅く、第二次世界大戦後からである。ライフスタイルの変化にともない鉄瓶や鉄釜を使用する場面が減ってきたため、風鈴など小型の製品がむしろ積極的につくられるようになったためであると考えられている。南部鉄で現在風鈴がどのようにつくられているのかといえば、伝統的な鉄瓶等、少ロット高付加価値品の製造法（素焼きの型を使う「焼型鑄造法」と呼ばれる方式。本誌Vol.3No.8、p 15～16参照）とは異なり、「生型鑄造法」というアルミ製の金型を使用する量産向きの方法で製造されている。

風鈴の材質と音色

ところで、冒頭に引用した句にある江戸風鈴とは、実はガラス製の風鈴であつたらしい。江戸中期以降、人気を博したのは長崎から江戸に伝わったビードロ技術によるガラス風鈴であり、その人気は江戸末期まで止むことはなかった。ガラス風鈴は、見た目に鉄以上に涼しげである点、ものめずらしさも手伝って江戸っ子の人気を呼んだのであろう。

さて音という視点からはどうなのであろうか。鉄の風鈴は荘厳な音を創り出す寺院の鐘と原理は同じで、共鳴周波数のずれによって美しい音色を生む梵鐘のミニチュア版ともいえ、形も釣鐘型のものが多かった。鑄鉄には高い振動吸収能力がある。それというのも成分中に豊富に含まれる黒鉛が、原子の振動を弱め、そのエネルギーを吸収してくれるからである。鉄の風鈴が、余韻に満ちた美しい音色を創り出せるのは、黒鉛が余計な雑音をカットしてくれるメカニズムによるものなのである。今では鉄の風鈴により風情があるとする向きが多い。

松笠風鈴や南部鉄風鈴等と並んで名の知れた風鈴に「明珍^{みょうちん}風鈴」がある。釣鐘型の従来の風鈴と異なり、棒状を基本とする各種の形状のものの組合せによって構成される。短いものは高く澄んだ音を、長いものは低い音を発し、さまざまな振幅、周波数の音が組み合わさって余韻とともに複雑な音色をつくりだす。

鉄の源流につながる背景

南部鉄は、砂鉄、岩鉄などの鉄源、川砂、粘土、木炭な



作業風景

出来上がった鑄型に銑鉄を流し込む「鑄込み」の作業。この部分は、現在でも、柄杓を使い、手作業で行われている。



型

アルミ製金型に、川砂を流し込み、上から圧力をかけて型を作る「生型」づくりの工程。川砂などは今でも現地のものが使用されている。

どの原料がすべて地元で産出されるという鑄物産業に最適の立地条件から発した。始まりは12世紀に遡るとも伝えられる。松笠風鈴の場合、風鈴そのものの歴史は200年前からといっても、16世紀中頃、近江の国から移住してきた鑄物師が鉄砲、梵鐘、灯籠などをつくりはじめたのが始祖という。明珍風鈴も、平安時代から連綿として続いた高名な甲冑師^{かっちゅうし}、明珍家の後裔^{こうせい}の作品である。明治維新後、火箸の製作を手がけるようになり、明珍製火箸は打ち合わせると鈴虫にもたとえられる澄み切った音色を発すると讃えられたところから転用されたものである。

小さな風鈴の背景を探っていくと、いずれも日本における鉄の技術の源と呼んでよいものにつながっていくことがことがわかり、まことに興味深い。

[取材協力：南部鉄器協同組合]